

食を超えた挑戦



球団創設50周年

ファイターズの果てなき挑戦

2024年、北海道日本ハムファイターズは球団創設50周年を迎える。さまざまなチャレンジを実現してきた、ファイターズが歩んだ50年の出来事を年表にし、その歴史を振り返る。

球団の歴史年表

日本ハムファイターズ 球団発足

1973年11月19日、日拓ホームから球団を買収し、公募により日本ハムファイターズに球団名を決定。本拠地を東京・後楽園球場とし、球団の歴史が始まった。



1973

本拠地を東京ドームに移転

後楽園球場が閉場となり、日本初全天候型多目的スタジアムとなる東京ドームに球団本拠地を移転。



提供：(株)東京ドーム

1988

ファーム本拠地を千葉・鎌ヶ谷に移転

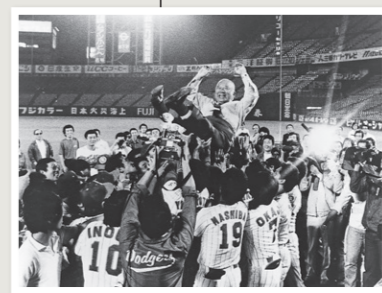
1997年秋にスタジアムと室内練習場、合宿所の3施設からなる「日本ハムファイターズタウン鎌ヶ谷」が完成した。



1997

球団発足後初のパ・リーグ優勝

日本ハムが球団を発足して初めての、悲願だったリーグ優勝を果たした。写真は胸上げされる大社義規初代球団オーナー。



1981



本拠地を札幌に移し、球団名を変更ファイターズの歴史は新章へ

2003年8月に本拠地を北海道・札幌ドームに移し、チーム名を北海道日本ハムファイターズへと変更。北海道での歴史を刻む第一歩となった。

2003

球団初のパ・リーグ連覇

ファイターズ史上初めてのリーグ連覇は年間勝率1位によるもので、プレーオフ以外の優勝は45年ぶりとなった。



2007

北海道ボールパークFビレッジ開業 本拠地を移し、球団は新たな時代へ

2023年3月、Fビレッジが開業し、球団本拠地も移した。スポーツを通じた地域との共創共栄を目指し歩み始めた。



2023

10年ぶりの日本一に

2012年以来4年ぶり7度目のリーグ優勝となり、日本シリーズでは広島東洋カープと対戦。4勝2敗で制し、日本一に輝いた。



2016

44年ぶりの日本一 25年ぶりのパ・リーグ優勝

北海道に誕生後初のリーグ優勝は、1981年以来初の優勝でもあった。日本シリーズを4勝1敗で制し、ファイターズとしては初の日本一となった。



2006

2022~	2012-2021	2008-2011	2003-2007	2000-2002	1995-1999	1993-1994	1992	1989-1991	1985-1988	1984	1976-1984	1974-1975
												
新庄 剛志監督	栗山 英樹監督	梨田 昌孝監督	トレイ・ヒルマン監督	大島 康徳監督	上田 利治監督	大沢 啓二監督 (第2次)	土橋 正幸監督	近藤 貞雄監督	高田 繁監督	植村 義信監督	大沢 啓二監督	中西 太監督

歴代監督年表

半世紀が過ぎてなお息づく 創業者の掲げた壮大な理念

2024年、北海道日本ハムファイターズは50周年を迎える。1973年の球団創設から半世紀の間、多くの人に愛されてきたファイターズには、日本ハム株の創業者で球団の初代オーナーとなった大社義規の大いなる夢が託されていた。「食とスポーツを通じた青少年の健全な育成」というスローガンを掲げた大社の言葉にはこんなものがある。

「これからの国を支える若者たちが健やかに育つてもらうためには、スポーツを大いにやってもらわねばなりません。動物性たんぱく質を供給するのが、健康体位向上の社会貢献なら、健全なプロ野球の発展に尽くすのも社会への貢献だと私は思います」

食とスポーツを通じて若者の心身を健全に育み、地域や人とつながり、ともに発展していくという創業者の理念は脈々とファイターズとニッポンハムグループに息づいている。

ファンサービス・ファーストを掲げ球団のあり方を問い直す

球団創設以来多くの人に支えられてきたファイターズは、さまざまな挑戦を通してほかの球団にはない魅力を培ってきた。日本の球団で初めて企業理念を取り入れ、地域・社会との共創共栄を図りながら「ファンサービス・ファースト」をモットーに、プロ野球球団の既成概念を取り払い、チームとファンの距離を縮める取り組みを数多く行っている。

ファイターズがこれまでに行ってきたファンサービスは、日本のプロ野球球団のあり方を変えるものにもなっているといえる。ファイターズの挑戦の歴史は、プロ野球界を変える挑戦の歴史でもあるのだ。

ファイターズの果てなき夢は 新たなステージへ

2023年に北海道ボールパークFビレッジが開業し、新たな本拠地でのスタートを切ったファイターズ。地域や企業との共創共栄を目指しながら、Fビレッジは一つの有機体として機能し始めた。周辺地域の街づくりは、これらが本番だが、常にその中心に在るのは北海道日本ハムファイターズであり、応援するファンや地域の人々だ。スポーツを通じ、人々の心と体の健康を育むコミュニティの実現に向けて、北海道日本ハムファイターズはこれからも日々挑戦を重ねていく。



北海道ボールパークF

2023年3月に開業し、多くの人を訪れたファイターズの新球場を含めたエリア、北海道ボー

ビレッジ開業の1年を振り返る

ルパークFビレッジ。好評を得ているが、すべてが順調だったわけではない。Fビレッジの2023年データをデータとともに振り返る。

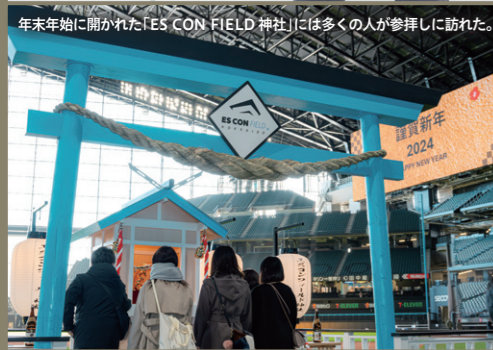


期間限定の「F VILLAGE Snow Park (エフビレッジ スノーパーク)」の様子。



NON-GAMEDAY

試合がない日にはさまざまなアーティストのライブ会場としても多くの人を集めた。



年末年始に開かれた「ES CON FIELD 神社」には多くの人々が参拝しに訪れた。



親子キャンプではフィールドの上にテントを張ってキャンプを楽しんだ。



「F VILLAGE 超盆踊り」では高さ7mのやぐらが生まれ、多くの人々が盆踊りに参加した。

GAMEDAY



WBCの優勝トロフィーがグラウンドを1周し、多くの観客の関心を集めた。



開幕セレモニーでは、ファイターズの選手がステージに集結し、士気を高めた。



CAP DAY

ファイターズフラッグシップストアでは150種のキャップを展開。



期間限定の衣装で「きつねダンス」を披露したファイターズガール。



新庄監督デザインの5試合限定ユニフォームに身を包んだ選手たち。



開閉式の屋根を開けた開放的なグラウンドの様子。



8月に行われた「超縁日」は親子連れをはじめ多くの人で賑わった。



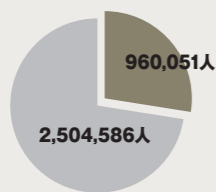
さまざまなジャンルの音楽が球場内に響いた「音楽」。



入場する観客を選手がハイタッチで迎える「ウェルカムハイタッチ」。

北海道ボールパークFビレッジ 道外からの来場者比率

Fビレッジへの道外からの来場者は全体の約30%にあたる100万人程度と見込まれる。



引用元：HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE ANNUAL REPORT 2023

① 主な受賞リスト (一部抜粋)

広告賞名	受賞名
2023 グッドデザイン賞	ベスト100
第57回日本サインデザイン賞 (SDA賞)	銀賞/北海道地区デザイン賞
日経トレンド 2023年ヒット商品ベスト30	ヒット商品 第6位
DIMEトレンド大賞2023	ライフスタイル部門賞
第48回 経済界大賞*	地方創生賞
German Design Awards 2024 (ドイツ)	Excellent Architecture

* (株)ファイターズスポーツ&エンターテインメント 小村勝代表取締役社長が受賞

② 主な改善内容 (一部抜粋)

お客様/スタッフからの声	改善	時期	
安全性 ハード面	・STAR LEVELから持ち物などの落下リスクがある	→ 注意喚起ならびに落下防止ネットの増設	3月
	・Fビレッジ内の階段が上りづらい	→ 手すりを設置	7月
利便性	・Fビレッジ、エスコンフィールド内で休めるスペースが少ない	→ 場内コンコースならびにFビレッジ内にベンチ設置	4月
	・場内にベビーカー置き場が足りない。安全に保管したい	→ パークアンドライドの実施/ベビーカー置き場の増設/ワイヤーロックの設置	6月
安全性 ソフトサービス面	・開場時に、お身体が不自由な方や妊娠中の方、お子様連れの方が長時間並ぶのが大変	→ リポビタンゲートにプライオリティーレーンを設置	5月
	・お身体が不自由な方、お子様が椅子に座れない、前の方で観られない	→ ボータブルチェアの貸し出し	7月
利便性	・飲食店の前に長蛇の列ができて試合観戦を楽しめない	→ モバイルオーダー、弁当販売、ドリンクステーション導入	3月~
	・場内のロッカーが不足している	→ チケットカウンターにてクローカーサービスを導入	4月

引用元：HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE ANNUAL REPORT 2023

されていることはほんの一部だが、スピード感を持って問題を解決することが、来場者のリピーター化にもつながっている。北海道ボールパークFビレッジはこれ

からも進化の手を緩めず、地域や人とのつながりを大切にしながら、訪れる人に愛されるボールパークを目指す。2024年も目が離せないスポットになりそうだ。

予想を上回る来場者は 道外や海外からも

2023年にFビレッジを訪れた340万人を超える人々のうち、調査の結果、全体の約3割が道外からと見込まれている(7ページグラフ参照)。国内は関東地方を中心に全国から、海外からは新千歳空港からシャトルバスが運行されており、北海道の新たな観光拠点として利用する人も多くなることがわかってきている。野球観戦はもちろんのことだが、観光客

2003年8月にファイターズが本拠地を移して以来、ニッポンハムグループの事業拠点が2割以上ある北海道に自前の球場を持つことはファイターズにとって長年の悲願でもあった。着工から約3年、満を持して2023年3月に開業した北海道ボールパークFビレッジへの来場者数は、スタートの年であった昨年、340万人を超えた。来場者は野球を観戦する人だけではなく、42%がそれ以外の目的でFビレッジを訪れていることが調査によりわかっている。ファイターズの本拠地であるということが来場のきっかけとなり、多くの人が球場以外の魅力ある施設を楽しむに訪れているのだ。

問題点を素早く改善し リピーターを獲得

もちろん、すべてが順風満帆というわけではない。実際に開業して来場者が利用を始めるのを見えてくる問題点もある。2023年はFビレッジを訪れた方のご意見・ご要望をくみ取り、問題点を改善し続ける1年でもあった。スタッフの声やSNSに公式目安箱を設け、そのアカウントに問題点を集約し、スピーディーに改善していった(7ページ表2参照)。記載

北海道ボールパークFビレッジは、国内外を問わずさまざまな賞を数多く受賞した(7ページ表1参照)。建築やデザインに関する多くの賞に加え、日経トレンド2023年ヒット商品の6位入賞は同ランキングの施設関係でトップ、第48回経済界大賞については地方創生を評価されている受賞だ。これらの賞は野球場の概念を覆す、世界がまだ見ぬボールパークを目指したことが評価されている。さまざまな業界から多くの支持を集めた結果の受賞であるといえるだろう。

数々の荣誉ある賞を受賞し 国内外から高い評価を得た1年

野球以外にも魅力的な 北海道の新たな観光スポット

が何度も訪れたくなるような観光スポットとしてFビレッジが人々から期待される。複合商業施設としてもさらなる進化を求められているということでもある。

沖縄をキャンプの中心地にしたファイターズと名護市の絆

沖縄キャンプに先鞭をつけたファイターズ

まだ寒い2月、暖かな沖縄で始まるのが各球団の春季キャンプだ。今では当たり前になっている沖縄などでの春季キャンプを初めて行ったのがファイターズである。1979年、まだ完成したばかりの名護市営球場（現タピックスタジアム名護）で、6人の主力選手が汗を流したのがその始まりだ。1981年には野手も含めた一軍全体のキャンプが名護で始まり、この年、ファイターズとして初めてのリーグ優勝を飾った。暖かな沖縄でのキャンプがその勝因と見てか、他球団も続々と沖縄で春季キャンプを行うようになり、沖縄は春季キャンプの中心地となっていったのだ。

今年で45周年。ファイターズと名護の由縁

ファイターズが正式に一軍の春季キャンプを行うようになった当初、名護市営球場

はまだ設備が整っていなかったが、徐々に整備され、のちに室内練習場も併設された。しかし、海辺に立つ名護市営球場は老朽化が早く、選手が怪我をしたことを契機に建て替えられた。その間ファイターズが米国・アリゾナ州でキャンプを行ったことで、名護にはもう戻らないのではと地元には不安が広がったが、ファイターズと名護の縁が途絶えることはなかった。今年もタピックスタジアム名護にはファイターズ一軍選手が球音が響いた。名護にはファイターズの後援会や協会があり、市を挙げて歓迎していることが街のあちこちから伝わってくる。

名護で春季キャンプが始まって今年で45周年。ファイターズが2024年に掲げたチームスローガンは「大航海」。新庄監督がファンから募り、自ら選んだものだ。毎年選手たちがやってくるのを心待ちにしている地元のファンに支えられ、今年もプロ野球が開幕した。新庄監督が舵をとる大航海の行方に注目したい。



球場内に開かれたグッズ売り場。キャンプ地限定のグッズもあり多くの人買い物を楽しんでいた。



名護市営球場の歴史資料を展示するメモリアルウォール。名護の人々とファイターズの結びつきを感じることができる。



スタジアムの周りにあるマンホールにもロゴやマスコットがあしらわれるほど、名護市民にとってファイターズは身近な存在だ。

ファイターズ創設50周年を記念して描かれたウォールアート。球団の初代オーナーで日本ハム創業者の社長義規から始まり、その歴史をつないできたファイターズのレジェンドである監督や選手を描いている。



© 2024 OVER ALLS Co., Ltd.

北海道日本ハム ファイターズの 挑戦とこれから

北海道日本ハムファイターズにとって、創設からの50年の道のりは決して平坦ではなかった。球団の歴史は挑戦の歴史そのものだ。ファイターズが歩んできた挑戦の過去と現在、エスコンフィールド HOKKAIDO の2年目に迫る。

周囲の反対を押し切り 球団を創設した創業者

一企業がプロ野球球団を所有することは、決して簡単なことではない。実際1973年に日拓ホームから球団を買収し、日本ハムファイターズが生まれるまでには、周囲の反対があった。球団の初代オーナーで日本ハム株創業者の社長義規は、主要金融機関や一部の役員から、「球団の所有が道楽だと思われる可能性がある」と反対を受けていた。そこに第一次オイルショックが起り、反対はさらに強まった。しかし、球団買収の交渉は調印寸前であり、ここで白紙に戻すのは信義にもとると、大社は球団買収を強行した。ファイターズの船出は挑戦そのものだったのだ。

ファンが少ない北海道で オンリーワンになるための挑戦

ファイターズの歴史の中で、本拠地が現在の北海道に誕生したことは、球団の歴史を語るうえで外すことのできない出来事だ。それまでプロ野球チームがなかった北海道に本拠地を置くことは、球団にとって大きな挑戦でもあった。球団本拠地移転決定直後に民間調査会社が行った調査によると、北海道民が主に応援している野球チームの中にファイターズの名はなく、移転後にファイターズを応援すると回答した人も25%にとどまった。それでも地域とともに発展する球団を目指して、ファンサービス・ファーストの精神でさまざまなイベントを打ち出すことで、北海道の野球ファンをとりこにしていったのだ。

2年目のエスコンフィールド HOKKAIDOと ファイターズのこれから

北海道日本ハムファイターズが生まれ20年が過ぎ、舞台は札幌ドームからエスコンフィールド HOKKAIDO へ。気持ちも新たに変わったファイターズに多くの人が求めるのはやはりチームの勝利だろう。

「新しいファイターズのあり方として、エスコンフィールド HOKKAIDO で得た利益を戦力増強につぎ込んで、ファンの方々にワクワク感を還元したい。心が浮き立つような大型補強をオフシーズンに行い、何度も球場に足を運んでもらえるような好循環を生み出したい」

そう語るのには球団社長を務める小村勝だ。新庄剛志監督が指揮官となって3年目、チームのバックアップ体制は充実している。Fビレッジにおける街づくりも進化している。Fビレッジには分譲マンションの建設が始まり、北広島駅西口周辺エリアには新しい商業施設やホテルも開業を予定している。地域と一体になったFビレッジの挑戦はまだ始まったばかりだ。歩みを止めることなく前へと進み続けるファイターズとFビレッジ。目の前で刻まれる新たな歴史をこれからも見守っていききたい。

tower eleven foodhall by Nipponham に うどん専門店「umai」がオープン!

tower eleven foodhall by Nipponham の「たべるスープ」がうどん専門店「umai」(ウマイ)にリニューアルされ、エスコンフィールド HOKKAIDO のオープン戦初戦が行われた3月12日にオープンした。北海道産小麦を使用したうどんに、お肉や「シャウエッセン®」をトッピングし、ニッポンハムグループの日本ピュアフード(株)が製造したうま味たっぷりのエキスを使用しただし汁で提供している。エスコンフィールド HOKKAIDO でしか食べられないオリジナルうどんをメインに販売中だ。

